

「地域振興の未来を考える」

観光プロデューサー ● 中村 圭一郎



私

は15年前に阪神大震災で被災し、その影響もあり12年前に沖縄へ移住した。それから観光産業に興味を持ち、世界33カ国を訪問してツーリズム現状を独学した。そして、8年前にガイド業を始めた。その頃、ある先輩から「観光は平和産業である」と教わった。現在は、観光プロデューサーという職業で地域の観光振興に携わる仕事をしている。

私が創造する観光の基本コンセプトは、一言で「僕らと地球が旅をする」という、人にも地球にもいい観光である。

例えば、糸満市という地域では、7年前から市職員や地域から課題を抽出し、地域のNPOと一緒に「あんまー（おかあさん）文化」の魅力を伝える市場の街歩きや、「海人・海洋文化の継承」をテーマにしたサバニ（木舟）を活用した体験型プロ

グラムを実施している。

一昨年度に内閣府が主催した「アジア青年の家」事業でも、アジア各国から選抜された高校生たちに、このサバニを活用した交流型プログラムを提供した。内容は、ビーチで3艇のサバニを使い「糸満ハーレー」さながらのサバニ競争を実施した。またその中で私は、2つのテーマを掲げた。①青年たちの国際交流を深めること。②糸満市の海洋文化の魅力を伝えること。だった。

サバニという舟を使用して漁をしていた時代の話やミーカーガンという水中眼鏡の原型となる海洋文化の歴史をワークショップ形式で伝え、青年たちにトーナメント制のサバニ競争をしてもらった。また、当日の現場運営は、市職員や地元ボランティアと一緒に受入を行い、「本当に充実した時間を過ごせた」と喜んでもらった。こういった事例は、国と地域が一体となった理想の地域振興への一歩と考え、これからその機会を民間企業や地域のNPOが一丸となって、持続可能な地域観光の発展に取り組んでいくようプログラムを継続的に実施している。

さて、観光振興を目的とした産業は、今後どのように発展していくのだろうか？

私は、ここ10年で経済的な振興の価値から、文化的な振興の価値（幸福）にシフトしていくと考える。例えば、消費者も環境問題に対する経済的なコスト負担を理解している中、生産者やサービス業などの供給側もエネルギーや自然に対して持続可能なビジネスを余儀なくされてきた。また、この不況もあり、消費者も高いお金を払って不満を解消する旅行（手段）を選択する時代ではなくなってきた。これからは、変化する価値観を自分自身で体験する「学びの旅への投資」という考えが一般的になるだろう。

「観光」とは、その土地の自然に生きる人々の暮らしを体感し、共有する平和交流産業である。しかし、それは、もはや学問という概念を超えた人々の「心の力」にまで影響を与えている。まさに生きる勇氣や希望、そして日々の創造力を豊かにしてくれる機会である。だが、その反面で地域の自然や文化を飲み込み、時には街全体を灰同然にしてしまふ怖さもある。

これから私たちは、時代の変化の中で「沖縄」という価値観を長期的にビジョン化し、沖縄全体の地域と産業が、有機的で持続可能なつながりを創っていかなくてはならない。

そのためには、人々や自然の大小豊かな多様性がこの島の未来にとって、どれほど価値ある財産かを改めて知る必要がある。それは、さほど難しいことではなく、普段沖縄の人々が口にする「沖縄が一番大好きさ」という、その「心の力」に表わされている。あとは、一致団結、この島の平和のために老若男女、国も地域も一丸となって行動するだけである。

私は、そんな中で観光という専門性を活かして、より具体的に楽しい機会をプロデュースし、この島の平和と発展に寄与できればと思う。

